

## 批評と紹介

Michael G. Cooke: *The Blind Man Traces the Circle:*

*Patterns and Philosophy of Byron's Poetry*

Princeton University Press, 1969. xiv+227 pp.

ロマン派詩人 Byron の詩は、容易に性格づけを許さないような複雑さと流動性を持つ。ロマン派の詩の通常概念、即ち、自己と外界との幸福な一体感、陶酔の域にまで達する純粋な感情の強烈さ、などを期待した読者は、しばしばそのような枠をはみ出す Byron の詩にとまどうことも多いであろう。又、微妙な暗示、象徴、緊密な作品構造を重視する人々には、Byron の詩のあるものは、粗雑、無秩序の印象を与え勝ちである。このようなこともあって、今世紀に入って、Byron の人気は落ち目であったし、彼に対する批評はかなり厳しいものであった。

しかし、伝記研究、個別的な作品研究や特殊研究に続いて、近年、Byron の総合的な理解と再評価が研究者達によってなされつつある。複雑なこの詩人の各局面を、様々な種類の各作品を、断片的にではなく、総合的なものとして見ようとする試みが重ねられて来た。その成果の一例は、Leslie A. Marchand の *Byron's Poetry: A Critical Introduction* (1964) である。多彩な Byron という人間の中には、従って、多種多様な Byron の作品中には（しかも一個の作品中においてさえ）、実に様々な要素がある。純潔な美への情熱的な憧れ、シニカルな露悪、激しい自己主張、病的な憂うつと倦怠、理

想の気高さ、冷静な人生の現実の認識、大らかな快活な気嫌のよさ——こういった様々の要素が、最初の叙情詩以来、物語、劇、諷刺詩等すべての作品に入れ代り立ち代り現われ、その絢爛たる移り変わりで読者の目を眩ませ、Byron の全体像を、矛盾に満ちた、把握し難いものとしてしまう。Marchand によれば、これこそ、ロマンティックな夢にとりつかれ、一方では、現実の人間界は、そのような夢には到底合致せぬ、制約された、墮落したものであることを認めぬには余りにも知的な、曇らぬ目を持つ人間が、誠実であろうとするとき、当然経るべき過程である。やがて Byron は、徐々に精神の平衡を得ると共に、様々の要素を統御することを学び、*Don Juan* という情熱的で、余裕があって、辛らつで、ユーモラスで、無頓着で、感動的な、独自の詩を創り上げるに到るというのである。因襲的な価値基準に従って人生のありようを割切る胡麻化しを拒否し、自分の目で見た様々の人間感情や価値の共存を容認する誠実な人間の持つ知的な包括性を示すものとして、Marchand は *Don Juan* を高く評価する。

ここに紹介する Cooke の著書も、基本的には同様の見解をとっている。第六章にわたって代表的な作品を扱った、バランスのとれた Byron 研究である。一つの特徴は、初期の叙情詩から *Don Juan* に到るまでの甚だ種類の異なった諸作品を、全体として相互に密接に関連づけて考えることである。叙情詩は Byron の詩作全体の中でむしろ孤立した位置を占めると Cooke 自身認めるのであるが、それら叙情詩の中に自然に溢れ出たロマンティックな感情と、最後期の物語詩の中で詩人が意識的に支持した感情の優位とは、結局同種のものである、つまり、Byron は、探究の遍歴の後、円を描いて出発点に立ち戻ったのだと、Cooke は示唆する。それが表題の意味するところであろうと思う。

Cooke の研究は、殆んど伝記研究の援用なしに、議論のレファレンスも作品そのものに絞っている。詩の総合的な意味を導き出すために、重要な箇所の構成や技法について、緻密な、洞察に富んだ、洗練された分析が行なわれている。他の主要なロマン派詩人には与えられて来たこの種の同情的な分析批評が、Byron に関しては不当に欠けていたのが実情なので、その点で Cooke の貢献は大きい。

当然のことながら、*Childe Harold's Pilgrimage* の第三、四巻、及び *Don Juan* にかなりの強調が置かれ、かなりのページ数があてられている。物語の構成を破って詩人自身の心の声が出て来る、混とんとした *Childe Harold* において、無限と理想とを求める自己の中の人間的限界を痛感しながら、支えを外部に求めて様々の救済手段を巡歴し、無効のままに、Byron は再び自己に立ち戻らざるを得ない。激しい苦悩の末に *Manfred* や *Cain* が遂に容認したように、無限を希求して止まぬ人間が現実と与えられている生存の根本的条件といえ、厳しく限定されたものであるから。しかし、問題が解決不能であることを悟って再び自己へ立ち戻るとき、その人の心は一步前進する。*Childe Harold* 第四巻で言う「目覚めた心」とは、人間の置かれた状況を赤裸々に直視

して、そこに認めた多様な真実の存在をあるがままに受け入れて包括する、視野の広い、正直な心である。それは、手に負えぬ真実を望ましいように小綺麗に割り切るために、通俗的な価値の権威に頼る安易さを肯んじないから、そのような心をひるまずに描こうとする作品には、結果として不統一や混乱が生じるのも止むを得ない。

断定には欠けるが、強い、このような心は、*Don Juan* において更に拡大されると、Cooke は言う。一見この詩が印象づけるけばけばしい混乱は、詩人の投げやりや力量不足の故の混乱ではなく、慎重に創り出された混乱であり、矛盾に満ちた人生の、人を困惑させるような真実を受容すべきだという態度の、磨き上げられた表現である。通常の道徳的公式や知的な判断を無効であるとする、あらゆる社会規準に対する徹底した懷疑主義を提示するために Byron が用いた、価値逆転や併立のための様々の技巧——物語に優先する分析の論理、同一イメージに与えられる多様な意味含蓄、逆説、oxymoron、機智、ひねり、bathos、更には微妙な脚韻の操作など——を Cooke は例証して見せる。

注目すべき点は、最終段階において Byron が彼の懷疑主義の限界を超えようとしていることに、Cooke がかなりの強調を置くことである。懷疑主義の故に多様な真実や価値や態度の共存を容認する、いわば消極的な包括性を僅かに乗り越えて、ストイックな人道主義とも言うべきある種の肯定的哲学が生まれつつあることを示そうと、Cooke は試みる。それは、ロマンティックな自己主張の自暴自棄的ヒロイズムと、現実直面してただ現実を受容する現実主義との両方に対して批判的な、厳しい第三の選択である。*The Two Foscari* の主人公の節操ある忍耐と無私の克己、*Don Juan* の包囲戦の挿話における激しい戦争憎悪、Tartar Khan の感動的な精神的ヒロイズムが、裏づけとして言及される。

最終章の示唆する Byron の肯定的哲学の議論がやや弱いことを、Cooke 自身気にしているらしいが、この懷疑主義克服の萌しの発展を待たずして詩人の生涯は間もなく終えたのであるから、それを責めるのは無理であろう。

Cooke の Byron 研究書は、英米文学科三、四年次以上向きであろうと思う。下級生向きには、先ず Marchand の方を読むことをすすめる。

(橋爪茂子)